

クモを闘わせる遊びの伝播と変遷について

—東京湾周辺地域における“ネコハエトリクモ合戦”の事例から—

小林 兆 太

KOBAYASHI Chota

非文字資料研究センター 2021 年度奨励研究採択者
高知県歴史文化財課 県史編さん室

【要旨】 クモを闘わせる遊びの文化（本稿では「クモ合戦」と記述）は、日本列島の太平洋側沿岸部を中心に広い範囲に分布していたことが川名・斎藤による先行研究で明らかにされている（川名・斎藤 1985）。本稿ではその中でも、東京湾周辺地域に多く分布しているネコハエトリ（*Carrhotus xanthogramma*）のオスを用いるクモ合戦について、筆者による実地調査で採集した事例を用いて整理・考察を行った。東京湾周辺地域におけるネコハエトリクモ合戦は先行研究（川名 1992）で指摘されているように、狭い地域の中でも用いられる語彙や知識が多様に変化する。本稿ではそうした文化の伝播と変遷がどのようにして現在に至るまで続いてきたのかを明らかにするため、次の二つの章に内容を分けて整理した。

一つ目は千葉県富津市で毎年5月4日に開催されている大会「日本三大くも合戦 横綱決定戦」について、現在も直接見ることのできるクモ合戦の事例を整理する章である。ここでは、大会参加者が大会当日までのクモの採集・育成にて用いている知識と、大会の試合にて観戦者を含めた人々がクモを見る際に用いている知識は必ずしも同じではないことを論じた。

二つ目は上記のような大会以外の場で行われてきたクモ合戦について明らかにするため、筆者が神奈川県横浜市、千葉県鴨川市、九十九里町、館山市にて調査した事例を整理する章である。ここでは事例を(1)クモ合戦のルール、(2)クモ合戦を行っていた人々、(3)クモの飼育容器、の三つに分けた。その結果、学校を舞台とした子どもたちによるクモ合戦文化の伝播と伝承についてまとめたほか、先行研究が報告していたように漁師などの大人によっても以前からクモ合戦が行われていたことを確認した。

以上を踏まえ、本稿では東京湾周辺地域におけるクモ合戦文化について、(1)川名・斎藤が論じた地理的な要因による伝播以外にも、学区割りや戦中・戦後の移住などといった要素を考慮する必要があること、(2)大会という行事が生まれたことが、現在におけるクモ合戦文化の伝承に影響力を持っていること、の2点を指摘したい。

The Spread and Transformation of the Recreational Activity of Spider-Fighting
— A Case Study of Battling *Carrhotus Xanthogramma* in the Tokyo Bay Area —

Abstract : The culture of the recreational activity involving the fighting of spiders, or spider battles as referred to in this paper, has been seen in Japan's Pacific coast regions and also extensively across the archipelago, according to the 1985 study by Takashi Kawana and Shinichiro Saito. Of the various spider-fighting practices, this paper seeks to analyze and study the matches staged between male *Carrhotus xanthogramma*, a spider species found in large numbers around

the Tokyo Bay area, using the field-work data collected by the author.

As noted in Kawana's 1999 study, the vocabulary and knowledge of these *Carrhotus xanthogramma* contests vary widely even within the small area around Tokyo Bay. In two sections this paper attempts to shed light on how the culture of spider-fighting has continued to spread and change over time until today.

The first section discusses contemporary spider derbies that spectators watch in person, using as a case study the Yokozuna Ketteisen Championship tournament held annually on May 4 in the city of Futtsu, Chiba Prefecture. This section explains how the knowledge that tournament contenders use to catch and breed spiders in the days leading up to the event is not necessarily the same knowledge that spectators and others use when watching the spiders on the day of the match.

The second part aims to gain insights into spider-fighting staged outside of formal tournaments, such as the one discussed above, by evaluating the spider-fighting practices studied by the author in Yokohama, Kanagawa Prefecture, as well as in the cities of Kamogawa, Kujukuri, and Tateyama in Chiba Prefecture. This section covers three topics: (1) spider battle rules, (2) spider battle participants, and (3) spider breeding containers. The study of these topics has led to an understanding of how the spider-fighting culture is being disseminated and passed on through children in school settings. This study also confirms that, as reported in earlier research, adults such as fishermen have long engaged in spider battles as well.

Based on the above findings, this paper draws the following conclusions on the spider-fighting culture in the Tokyo Bay area: (1) In addition to the geographical factors mentioned by Kawana and Saito, school districting and relocation of people during and after World War II should be considered as factors contributing to the spread of the spider-fighting culture; and (2) The creation of formal events like tournaments has helped to preserve the present-day culture of spider-fighting.

はじめに

節足動物の一種を闘わせる遊びの文化としては、コオロギ、カブトムシ、そしてクモなどを用いるものが知られている。日本列島におけるクモを闘わせる遊びの文化（以下、本稿では「クモ合戦」と呼称）は、川名興と斎藤慎一郎が行った先行研究において、九州から房総半島にかけての太平洋沿岸地域を中心に広く分布していたことが明らかにされている（川名・斎藤 1985）。中でも鹿児島県始良市や高知県四万十市、神奈川県横浜市や千葉県富津市といった地域では現在でも、この遊びを行う大会が毎年開催されている。本稿では東京湾周辺地域に分布する、ネコハエトリというクモの一種を用いるクモ合戦の文化に注目し、筆者によるフィールドワークで得た資料を中心に用い、整理・考察を行う。川名は東京湾周辺地域のネコハエトリクモ合戦について、隣り合った複数の地区間でクモが異なる方言名で呼称されるなど、狭い地域の中でも用いられる語彙や知識が多様に変化することを指摘している。本稿はそうした文化の伝播や変遷がどのような背景のもとで現在まで続いてきたのかを問題とした。「Ⅱ. 大会の中のネコハエトリクモ合戦」では、現在、直接クモ合戦を見ることのできる主な場である「大会」での事例をとりあげ、「Ⅲ. 東京湾周辺地域のクモ合戦」では、「大会」が行われるようになるより以前に行われていたクモ合戦の事例をとりあげる。採集したそれぞれの事例を整

理し、先行研究の再検討を行った上で新たな視点の提示を目指していく。

なお、本文中の記述において、『「 」』は文献からの引用や、収集した事例の中で実際に確認できた語彙。『“ ”』は筆者が本稿を執筆するにあたって強調したいと考えた部分に対してそれぞれ用いた。

I. 概要

(1) クモ合戦とは

クモ合戦を直接、体系的に扱った研究としては、川名興と斎藤慎一郎によるものが主となる。両氏は共著『クモの合戦 虫の民俗誌』（川名・斎藤 1985）にて、全国的なクモ合戦文化の分布を調査し、分布図を作製した。それによるとクモ合戦は太平洋沿岸地域のほか、日本海側でも新潟県などで部分的に行われていた記録が残っているとされる。

また、用いられるクモの種類（以下、特に断りがない限り生物名は標準和名にて表記）にも地域性が存在し、最も広い地域で用いられるコガネグモ（円形の巣を張る、黄・黒・白色の体色の種）をはじめとして、ネコハエトリ（巣を張らずに樹上などを歩き回る、黒色の体色の種）、ジグモ（建物の壁面などに筒状の巣を張る、こげ茶色の体色の種）、カバキコマチグモ（笹の葉を折り畳んだ中に産卵する、黄色の体色の種）などが知られている。冒頭で挙げた大会が行われる地域についていえば、鹿児島県と高知県の大会ではコガネグモ、神奈川県と千葉県の大会ではネコハエトリが用いられる。

クモ合戦の歴史的経緯については、それを直接に示す文献資料の数が乏しいためにほとんど具体的には明らかにされていないが、植木朝子は『虫たちの日本中世史『梁塵秘抄』からの風景』（植木 2021）にて次のような近世期の資料を挙げている。柳亭種彦が著した『足薪翁記』では「蠅取蜘蛛」と題した一節にて、延宝年間に「座敷鷹」と呼ばれる遊びが流行したとしているが、これはハエトリグモの一種に蠅を捕まえさせ、その速さを競ったものであるとし、クモを飼育する容器も蒔絵などが施された豪華なものが用いられていたのだという。直接クモ同士を闘わせるものではないが、近世期には既にクモを用いた競技性のある遊びが行われていたことが分かる。

斎藤・川名はまた、クモ合戦が沿岸地域で主に行われてきたことに注目し、この遊びの文化が元は漁の吉凶を占うために漁民によって行われ、黒潮の流れに乗って広まったものであると考察している。

(2) ネコハエトリとは

ネコハエトリ（学名 *Carrhotus xanthogramma*）は、クモ綱クモ目新蛛亜目ハエトリグモ科コゲチャハエトリグモ属に分類されるクモの一種である。体長はオス・メスともに成体で平均7mmほどに成長する（八木沼 1986）。餌を捕獲するための巣は張らず、灌木の葉の上などを飛び移ったり、歩き回ったりしながらハエなどの小型の昆虫を捕食する。北海道を除く日本全国に一般的に分布している。オスの成体は春から初夏にかけての繁殖期、メスをめぐって闘う習性を持っており、ネコハエトリを用いるクモ合戦ではこの習性が利用される。

また、ネコハエトリと分布を同じくし、よく似た外見を持つクモとしてマミジロハエトリがいる。この種はクモ合戦において、例えば後の節で調査地として挙げる千葉県の富津市では「カンタフン



写真1 クモ合戦で用いられるネコハエトリのオス。2018年5月4日富津市 発表者撮影

チ」と呼ばれて区別され、積極的には闘わない種としてクモ合戦には用いられない。川名は「ネコハエトリを食べてしまう」として忌避されたという事例も報告している（川名1992）。

(3) ネコハエトリのクモ合戦

ネコハエトリのクモ合戦においてはオス同士がメスをめぐって闘う習性が利用される。オスは人間の相撲のような動きで前肢を組み合い、負けを認めた方は自ら逃げ出す。この際、勝った方のオスはその後を追いかけず、完全に勝敗

が決定する。節を改めて詳述するが、その闘いには自然下でもクモ同士の間で闘いのルールが存在するかのよう動きが見られ、それは大会における人間が定めるルールにもある程度の影響を及ぼしている。

ネコハエトリを用いたクモ合戦は房総半島から三浦半島にかけての沿岸部にて盛んに行われていたことが、後述の先行研究では明らかにされている。事実、房総半島においては幼少期に経験したクモ合戦についての思い出を持っている話者に多く出会う。例えば2016年に鴨川市の漁港にて聞き書き調査を行った際、昭和10（1935）年生まれの男性から、小中学生の頃には地域の漁師たちが金銭を賭けてクモ合戦を行っていたという話を聞くことができた。それによれば当時の漁師たちは、度々クモ合戦にて賭け事を行ったとして警察とトラブルを起こしていたのだという。賭け事に関する事例は先行研究においても確認することができ、川名が報告しているものでは、子どもが採集し、育成したクモを漁師が買い取っていたという事例も存在する（川名1992）。時代を遡ればクモ合戦が基本的に子どもによって行われる遊びであっただけではなく、大人による金銭の絡む形での賭け事としての遊びでもあったことがうかがえる。

また、房総半島の事例ではネコハエトリを用いたクモ合戦の分布と重なり合って、カバキコマチグモ、ジグモ、そしてコガネグモといった異なる種のクモを用いたクモ合戦の事例も採集、もしくは先行研究にて確認することができる（川名

1992）。

例えば後の節にて登場する話者F-5氏が語ったところによると、「カンピョウ」と呼称されるクモ（おそらく標準和名でカバキコマチグモと呼称される種と思われる）が笹の葉を丸めて作っている巣を広げ、巣同士を近づけることで闘わせる遊びが、ネコハエトリのクモ合戦の時期が終わった直後に行われていたという。このクモは毒を持っており、F-5氏は子どもの頃に「カンピョウ」に噛ま

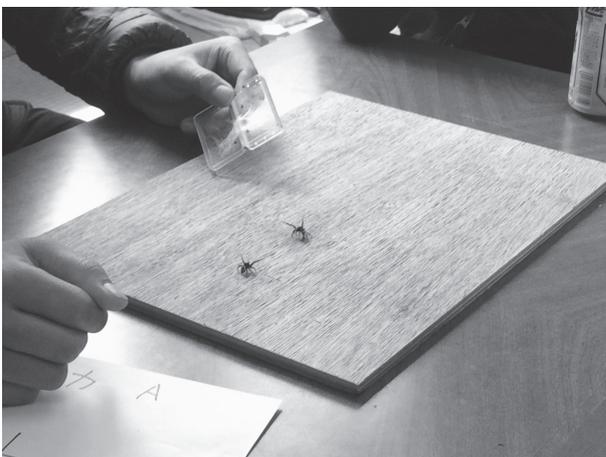


写真2 ネコハエトリを用いたクモ合戦の様子。2017年5月3日富津市 筆者撮影

れた場所が腫れたという経験を語っていた。また、F-5氏はコガネグモを「カミナリグモ」と呼称していたという。

(4) 研究史

房総半島におけるネコハエトリクモ合戦に注目した研究としては、川名興が独自に詳細な調査に基づいたものを行っている。『クモの合戦 虫の民俗誌』（川名・斎藤 1985）の中でもネコハエトリのクモ合戦は扱われていたが、後に発表された論考、「くも合戦覚え書き」（川名 1992）はその内容を補完するものとなっている。川名は主に房総半島において、ネコハエトリを指す方言名の分布と変化を明らかにした。

房総半島はいわば生物方言の宝庫で、同一種の生物がところにより実に様々に呼び分けられている事実がある。往古、海岸線に沿った各部落は交流に乏しく、同じクモを用いた喧嘩遊びに興じながらも、山一つ隔てれば呼び名が違う、などということも稀ではなかった。……富津市についてみると、ホンギ地帯、カンキ地帯、フンチ地帯と方言分布の上で地図が塗り分けられ、これらは互いに混じり合うことが少ない。（川名 1992：58）

川名は水上の人の移動と、クモ合戦の関連に注目した。隣り合う地帯での方言の混ざり合いは少ないものの、養老川、小堰川、小糸川の流域で海岸から離れた地域まで「フンチ」、「ホント」、「ホンチ」の系列の分布が見られる。さらに東京湾を挟んだ対岸に位置する横浜でもクモ合戦が行われており、さらに富津と類似する「ホンチ」という方言名が分布することから、川名は川、海等の交通路で人が行き来し、クモ合戦の文化を伝えていたことを指摘している。

以上のような先行研究により、房総半島全体のネコハエトリクモ合戦文化の分布が明らかにされてきたが、一方で個別の地域に注目した調査・研究は充分に行われてきていない。本稿では次の章より、房総半島の中でも東京湾沿岸に位置する千葉県富津市の事例に着目し、この地域のクモ合戦が現在どのように行われているのかを論じていく。

以降では、大きく二つに章を分けて事例の検討を行う。まず一つ目として、千葉県富津市にて年に一度開催されているネコハエトリクモ合戦の大会「日本三大くも合戦 横綱決定戦」について、筆者の現地調査に基づき、参加者がどのようにクモを採集・飼育し、また、どのように大会が行われているのかをまとめる。それに続き二つ目として、東京湾周辺各地におけるネコハエトリクモ合戦について筆者による聞き書き調査で得た事例を整理し、大会以外で行われてきたクモ合戦についてまとめる。以上によって、東京湾周辺地域で行われてきたクモ合戦の地理的關係と時代的変遷、大会という行事が与えた影響について論じる。

具体的な事例としては、前半部では筆者が2014年から2019年にかけて千葉県富津市にて調査した事例を、後半部では筆者が2021年から2022年にかけて神奈川県横浜市、千葉県鴨川市、九十九里町、館山市にて調査した事例を扱うこととする。

II. 大会の中のネコハエトリクモ合戦

(1) 千葉県富津市におけるクモ合戦の伝承

調査地である千葉県富津市は、房総半島の西側、東京湾の入り口に位置する富津岬を擁する地域である。以前から海苔の養殖などの海の生業が発展してきており、工場の増加などによってそれらが下火になった現在においても当時の記憶を持っている住民は多い。筆者が聞き書きを行った富津出身の男性によると、漁業を営んでいた家庭の子どもは、親が早朝から仕事をし、昼間は就寝していることから子どもだけで遊ぶことが多く、そういった集団の中では他の遊びとともにクモ合戦の知識が伝承されていたのだという。先述の川名による先行研究の通り、房総半島の多くの地域と同じく、富津にもネコハエトリを用いたクモ合戦の文化が存在している。川名が報告している事例は主に、大正～昭和期にかけて小学生などの子どもが行っていたクモ合戦についてである。川名は富津市内各地で採集した事例を報告しており、それによれば、各地で主に男子の遊びとして認知されていたことが分かる。そうした子ども向けに、桐などで作られた専用の飼育容器⁽¹⁾も販売されていたという。また数は少ないが、子どもだけではなく漁師の間でクモ合戦が行われていたという事例も、富津市内では富津や竹岡といった地域のものが挙げられている。竹岡の事例は漫画家の白土三平による著書『白土三平フィールド・ノート⁽²⁾ 風の味』(白土 1988) の記述を引用する形となっている。引用元にて白土は、1983 年の 4 月～5 月に竹岡で行われていたネコハエトリのクモ合戦について、次のように記述している。

コノシロという魚は姿がよくて、味がよくて、値が安い。(……) キロあたり 10 円以下に下がれば、シケでもないのに漁師たちは漁を休む。船から組合まで運ぶのに子供の手間賃にもならないからである。(……) すると浜の男どもは、ザルとマッチのあき箱を入れた袋を持って山へ出かけるのである。笹やぶ、茶のしげみ、イバラの中、そこらじゅうをかけまわって小さな虫を見つけるのに血まなこになるのである。(白土 1988 : 45)

富津市竹岡の漁師にとって、クモ合戦は漁を休む期間の遊びであったことが分かる。

房総半島の他地域と同様に、富津市内でもネコハエトリのオス成体を指す方言名は地区ごとに細かく変化しており、川名は「カネグモ」「カネコ」「キツツイ」「カンキ」「ホンギー」「ホングモ」「フングモ」「フンチ」「ゴトグモ」「オトグモ」といった事例を報告している。⁽²⁾

富津岬にほど近い富津八坂神社では毎年 5 月 4 日にこのクモ合戦の大会である「日本三大くも合戦横綱決定戦」が行われている。

(2) 大会の概要

「日本三大くも合戦 横綱決定戦」は、地域出身で幼少期に友人同士でクモ合戦を行っていた経験を持つ有志が集まり、「富津フンチ愛好会」を結成して 1999 年から毎年、5 月 4 日に開催しているものである。会場は晴天時は富津八坂神社境内、荒天時は富津小学校体育館である。この大会はネコハエトリのオスを闘わせるトーナメント形式となっている。

他にもネコハエトリを用いるクモ合戦の大会としては、「横浜ホンチ保存会」の主催で毎年5月3日に横浜市の金沢自然公園で開催される「横浜ホンチ相撲春場所」があり、中には5月3日、4日と続けて両大会へ出場する参加者もいる。

以下に、公式ホームページに掲載されている公式ルールを引用する。

(原文ママ)

- 富津フンチ愛好会主催の一般予選に参加するには、ネコハエトリ（フンチ）のオス1匹を用意する事。
- 一般トーナメントは熟練された行司が行いますが、闘う気が無い蜘蛛はメス蜘蛛を見せてやる気を出させますが、それでも闘わない時は不戦敗とする。
- フンチは8本足ですが、サと呼ばれる一番前足が無い蜘蛛は参加不可とするが、サ以外が無い蜘蛛の場合は参加可能。

「理由」

- フンチの闘いは、サと呼ばれる前足（手）を左右に振り、相手を威嚇します。相手を威嚇する動きがフンチの闘いの醍醐味とされる事から、富津フンチ愛好会の大会では参加不可としています。
- フンチ同士が組み合い、逃げ出す事で勝敗が決まり、逃げたら負けの簡単なルールです。

大会への参加者は1人につき1匹ずつクモをエントリーさせるのだが、参加者はその際に手持ちのクモに名前を付ける。例として、2017年大会の決勝トーナメントにおいては次のような名付けが見られた[表1]。

クモが闘う舞台（土俵）の大きさには特に決まった規格はなく、畳や木の板、小さなテーブルが用いられていた。壁の存在しない平面であるという点のみが共通している。人間の相撲とは異なり、クモが土俵の端から外へ出てしまったとしても、試合の進行に問題がないと審判が判断した場合はそのまま続行となる。

大会は一般予選と決勝トーナメントの二段階で進行する。前半、一般参加者はいくつかの予選トーナメントに分かれて試合を行い、決勝トーナメントへの進出を目指す。

大会当日の午後から行われる決勝トーナメントにはシード枠が複数設けられている。これは大会の進行をスムーズに行うために設けられたもので、大会側から認定されているクモ合戦を行う団体それぞれから代表者が選ばれ出場する。例えば、主催である「富津フンチ愛好会」の会員は大会前日の5月3日に富津漁業協同組合の事務所にて予選会を行ない、決勝トーナメントのシード枠へ出場させるクモを決定する。予選会では各々、まず自らの手持ちのクモから最大三番目までの強さのクモを決める。これをイチリキ（一力）、ニリキ（二力）、サンリキ（三力）と称し、イチリキは三つ、ニリキ、サンリキはそれぞれ一つずつのトーナメント戦を行って合計5

表1 2017年大会の決勝トーナメントに出場したクモの名前を、初戦の対戦ごとにまとめた。
筆者作製

試合	対戦するクモの名前
①	赤岩瀬 ゴロウ丸
②	アサヒ ハママル
③	人生号 いち号
④	戦風鬼 子三郎
⑤	二代目小太郎 青ひげ
⑥	マメタンク 赤子の星
⑦	鎮西丸 小岩丸
⑧	赤ひげ 小鉄

匹のクモを選出する。つまり大会において「富津フンチ愛好会」が持っているシード枠は5枠ということとなる。2018年大会の時点では、シード枠を持っていたのは「富津フンチ愛好会」、「闘蜘蛛會」、「富津フンチ倶楽部」、「横浜ホンチ保存会」、2018年から追加された「武光會」の5団体と、加えて2017年大会優勝者の1枠であった。なお、2017年大会までシード枠を持っていた「内房フンチ愛好会」は団体自体が消滅したため除外されている。「富津フンチ愛好会」の会員によれば2019年の時点において、シード枠を持ちうる新しい団体も現れてきているのだという。

(3) 大会までの準備

① 採集

ネコハエトリはある程度太陽光が差し込む灌木の葉の上でよく見つかることとされる。富津市内にて、ネコハエトリの生育に適した環境は地元から産する材木を利用する機会が減ったことから灌木がより大きく育つようになってしまい、減少傾向にある。

「日本三大くも合戦 横綱決定戦」主催団体である「富津フンチ愛好会」の会員、F-1氏、F-2氏、F-3氏、F-4氏は全員が富津出身、昭和53(1978)年～昭和57(1982)年生まれの同世代である。彼らは大会の約1ヶ月前からクモの採集を始める。ネコハエトリのクモ合戦ではクモを成体となる一つ前の段階、富津周辺の地域では「ババ」と呼称される亜成体の時期から採集することがある。クモの育成については節を改めて詳述するが、早い時期に行う採集ではこういった「ババ」の個体を採集し、脱皮して成体となるまで育成することとなる。彼らは採集のスケジュールについて、4月25日周辺を過ぎると成体となったクモがメスをめぐって闘い始めるので怪我をしてしまうため、遅くとも成体になって10日以内の時期に採集しないと良い個体が入手できないと説明している。F-1氏曰く「人の手が入りすぎず入らなさ過ぎずな場所」で良いクモが採集できるのだという。そういった条件の土地に生育しているマテバシイの灌木の、大きな葉の上にクモが潜んでいるという。このように、ネコハエトリが植物の葉の上に出てきている状態を富津地域では「デフしている」と表現する。

一方、同じく富津市内在住であるものの、生年は昭和28(1955)年と上述の4人とは離れているF-5氏、F-6氏、F-7氏の3人は大会の約5ヶ月前、年始の時期から採集を始めることがあるのだという。この場合、落ち葉の下などに潜んでいる越冬中の「ババ」を採集し、温度を調節しながら大会に合わせて成体へと脱皮させることとなる。彼らはこの遊びを親の世代から教わり、幼少期にはクリスマスの時期に「ババ」を採集し、温めることでクモに季節を誤認させて成体へと脱皮させて遊んでいた経験を語っている。

② 個体差

採集にあたり、大会参加者はより強いクモを手に入れるために、その個体差に注目する。ネコハエトリに関しては多くの個体差の区別、命名が存在している。

現在においても大会にて盛んに聞くことができる分類としてはクモの体色によるものが挙げられる。例えば上述の中で昭和50年代生まれのF-1氏、F-2氏、F-3氏、F-4氏は、「ケツ」と呼称されるクモの腹部の色によって「アジロケツ」(黄色)、「シロケツ」(白色)、「アカケツ」(赤色)といった分類をしている。それぞれの体色によって個体の強さを判断でき、例えば「シロケツ」が

強い個体とされる一方で「アジロケツ」「アカケツ」は好まれず、特に「アジロケツ」は弱いため体が大きい個体であったとしても採集はせずに逃がすのだという。また個体差とはいささか離れるが、関連するものだと生息していた環境によっての区別も存在し、特にバラの木に生息していたクモは富津地域においては「バラグモ」(F-1氏曰く、横浜地域では「バラケツ」と呼ばれ、強い個体とされていた⁽³⁾という。

一方で採集の場面ではこれらのような個体の強さの判断はある種非現実的なものと考えられることもあるようで、対してより現実的な基準として前肢の長さ、腹部の細さといった要素が重視されることも多い。ここでは、「サ」と呼称される前肢が長く、太く、「ケツ」と呼称される腹部が細い個体が強いとされる。

前者の体色による分類も、後者の形態による分類も、少なくとも筆者が調査を行った大会参加者の間ではある程度複合的に用いられているといえるのだが、言及される場面ではそれぞれ傾向が見られる。大会前、採集や後述する育成の段階では形態に注目した個体差への言及がよく見られるのだが、大会当日の試合中ではそれまでと比べて体色に注目した言及がよく見られるようになるのである。

③ 育成

前述の通り、ネコハエトリのクモ合戦においては成長の段階をまたいだ育成が行われる。そのため、亜成体から成体にかけての生活史に対する知識を一部の参加者は持っている。

例えば、F-1氏はネコハエトリの成長段階に応じて次のような呼び分けをしている。

「ババ→マーク→ミズ・ビル→フンチ」

各名称について解説すると、「ババ」が亜成体の段階、「マーク」が脱皮直前の段階、「ミズ」もしくは「ビル」が脱皮直後の段階、そして「フンチ」がオスの成体となる。なお、メスの個体は成体であっても「ババ」と呼ばれる。オス、メスともに亜成体が「ババ」と呼ばれることは、茶褐色で毛に覆われた姿がメスの成体と類似しているためと考えられる。F-1氏曰く「ミズ」の段階にある個体は非常にデリケートであり、この時の扱い方がその後の育ち方に影響してくると説明している。

先行研究ではこれよりさらに詳細な成長段階の分類が記録されており(川名・齋藤1985)、これは卵から老齢の成体までに及ぶものであった。生活史全体を区別する方言名が存在することは、川名による事例採集が行われた時点、もしくはそれ以前において生活史全体を人為的な影響下に置いたクモの育成が行われていたことを示唆しているとも考えられるが、今現在それを論ずるにあたって手掛かりとなるような事例は先行研究や過去の報告においても見られず、調査においても採集できていない。

クモの餌としては主にハエが用いられる。ハエの採集、クモへの給餌の方法は個々人でそれぞれ異なる。F-1氏曰く、クモへ自然下での限界を超えて餌を食べさせることで大きく育成する手法は大会参加者それぞれが最も秘密にしていることなのだといひ、筆者は今回に至るまでの調査では事例を収集することができなかった。

また、クモに栄養ドリンクや焼酎を与える参加者もいた(あるいは現在においてもいる)ようである。

④ 大会当日

「日本三大くも合戦 横綱決定戦」は毎年5月4日に富津八坂神社の境内にて開催される。本節では2018年大会の進行を記述しつつ、大会現場において何が行われているのかを具体的に整理していく。

2018年5月4日、9:30までの一般エントリー受付が終了し、9:35から開会式が始まった。まず大会の決勝戦で審判を務めることとなる人物の挨拶から始まり、市長、立て続けに3人の市議会議員の挨拶と続く。この3人の市議会議員のうち、1人は大会への出場者でもあった。続いて優勝旗と優勝カップの返還があり、10:15から午前の部、予選トーナメントが始まる。

今回はA～Jまでの10個の舞台が設けられ、それぞれで組まれたトーナメントの同時進行となった。まず「子供の部」の予選が始まり、ある程度試合が進行したところで11:00から大人の部の予選が始められた。試合では、いくつか独特な語彙が用いられる。これについては以下に〔表2〕として整理した。

表2 「日本三大くも合戦 横綱決定戦」の試合で観戦者や参加者、審判が用いる特徴的な語彙の例。筆者作製

語彙	意味
カンマ	勝負
ナリ	参加者同士と、クモ同士の位置関係が同じである状態
ギャク	「ナリ」と反対の状態
フズ	クモが体勢を低くして防御の姿勢をとること
ペコる	組み合っているクモが腹部を振る動作 富津市内でも青木周辺では「ビをいれる」と呼称される攻勢に出る際の動作であると思われる
トぶ	負けたクモが跳んで逃げること
クイガンマ	クモが怪我をしてしまう勝負
ベが出る	組み合っているうちに怪我をして体液が出ること
ナガガンマ	長時間に及ぶ勝負

これらの語彙が、審判から出場者へ、もしくは審判から観衆へ状況を説明する際に用いられる。体長10cm前後のクモが素早く動き回り、位置関係や試合展開もめまぐるしく移り変わる試合となるため、これらの語彙を会場全体が共有していることで情報の伝達を早めることができているとも考えられる。

午前に行われた予選トーナメントの結果をもとに決勝トーナメントの表が生まれ、12:30から午後の部、決勝トーナメントが始まった。この年の大会の決勝トーナメントでは前年に比べ、全体的に試合が長引く傾向にあった。午前と異なり、午後では試合を同時進行しないため、各試合時間が長いものとなれば大会自体の終了時間も遅くなる。優勝が決まり、閉会式が始まったのは16:00のことであった。2019年大会ではこのことがあってか決勝トーナメントの進行が見直され、2試合同時進行となった。このため、2019年大会の閉会式は30分早まり、15:30からの開始となった。大人の部、子供の部それぞれの優勝者には優勝旗と優勝カップのほかに景品が授与される。景品としては、米3俵のほか、遊園地、プロレス観戦のチケットが用意されている。米は以前は米俵の形で渡されていたようであるが、現在では袋となっている。

⑤ 試合の進行

土俵の上に降ろされてから決着がつくまでのクモ同士の動きを見ていくと、次のようにある程度のパターンに整理することができる。

- 1 お互いを視認するとゆっくりと距離を詰めていく。
- 2 十分に近づくと両方の前肢（サ）を広げ、威嚇し合う。
- 3 両者とも戦意があればそのまま頭を突き合わせ、伸ばしていた前肢を相手の腹部へ覆いかぶさるようにして組み合う。
- 4 腹部（ケツ）を上下させる動き。
- 5 一旦前肢（サ）を解いて威嚇し合うような動き。
- 6 4と5を繰り返し、やがて片方が逃げ出す。

公式ルールにおいて闘いの醍醐味とされている、2の部分にあたる前肢（サ）を振って相手を威嚇す

る動きは組み合うまでの時間に行われるものとなるのだが、この間はクモを刺激しないように周囲は静粛にすることが求められる。逆に一度組み合ってしまったら、周囲の人間がどんなに大きな声を出して騒ごうともクモが闘いを途中でやめることはない。つまり組み合っている時間が長ければ長いほど、周囲の人間が盛り上がり表現しながら観戦することができる時間も長くなるのである。試合を見ていると、周囲から「良い闘い」と評されるのは組み合うまでの時間が短く、決着がつくまでが長いものの方であることが多かった。試合の展開に対して声を上げ、語り合いながら観戦することも、大会の場に集まる人々の楽しみの主要な要素となっていると考えられる。

2017年大会の決勝トーナメントについて、各試合の中で見られた周囲からの反応を書きとったものを表に整理した〔表3〕。

これを見ると、その闘いぶりについての言及ではどちらか片方のクモが優れているというような内容のものは⑦の試合のものを除いてほぼなく、⑨⑫のような、クモが相手の攻撃を防ぐ動作へのものが多数を占めている。つまり試合の決着がなかなかつかないことへの言及であり、クモ合戦を観戦する人々は試合の決着よりも、試合中にクモ同士が組み合っている際の駆け引きの方を楽しんでいるように読み取れる。

このように、富津においてネコハエトリクモ合戦を行ったり、観戦する人々は、試合の中でよりクモ同士が激しくぶつかり合う場面を好み、また、一方的に強いクモが弱いクモに勝つような試合ではなく、互角の力を持ったクモ同士が長い時間をかけて組み合う試合を望む傾向にあるといえるのである。そうであるからこそ、勝敗が決まった際の歓声も大きなものになる。

採集・育成の段階、大会本番と、富津のクモ合戦のスケジュールを二つの段階に分けて考えると、それぞれの場面で注目されるクモの要素に違いが見られるということが分かる。採集・育成に際しては特に重視されるのは体の大きさ、前肢（サ）の長さであり、腹部（ケツ）の色の違いによる強さの



写真3 決勝トーナメントの舞台と参加者。2019年5月4日富津市 筆者撮影

表3 2017年大会の決勝トーナメントの試合にて、周囲からの発言を試合ごとにまとめた。筆者作製

試合	クモについて	闘う様子について
①		
②		・「ベロツテル」(組み合っているクモが腹部を振ること)
③	・(いち号)「病気になるような動き」	
④	・(戦風鬼)「イロクケツ」	
⑤		
⑥	・(赤子の星)「アカケツ」	・「ガツ」(相手のクモを食べてしまうこと)
⑦	・(鎮西丸)「サが太い」「ヒノマル」「アカイ」 ・(小岩丸)「シロイ」 ・(両者とも)「同じくらいのサイズ」	・(小岩丸が鎮西丸に押されているのを見て)「目方が違う」 ・「キカネエ キカネエ」
⑧		・(体格は小鉄の方が大きい)「赤ひげが上手い」
⑨		・「トバネエ トバネエ」(押されても跳んで逃げないこと) ・(負けたハママルに対して)「あのケツでよくやった」
⑩		
⑪	・(マメタンク)「このケツは逃げねえ」	
⑫		・「トビそうでトバない」
⑬		・「一発目でトバなければ大丈夫」
⑭		・「上から組んでしまっはダメ」
⑮		・「良い闘い」「さすがは決勝」

傾向はあくまでもジンクスのようなものとして捉えられているようであった。一方、大会本番の試合中における周囲からの反応では、色の違いへの言及がかなり多くなる。また、サの大きさよりもむしろケツの大きさの方がクモのスタイルへの評価として多用されていることも特徴的であった。理由としては、

- ・大会へ出てくるようなクモになると大きさも採集の段階ではなかなか見られないようなものばかりになっていくためにわざわざそこを評価する必要がなくなってくるため。
- ・2月の調査でインタビューを行った話者は全員大会では若手に属する年齢であったので、本番で観戦していた世代の人々とはクモに関して重要視する要素が異なるため。

等が考えられるが、これに関してはさらに多くの聞き書きを行って情報を集める必要がある。

⑥ 大会後

この大会においては、試合に負け次第その場でクモを逃がす参加者も多い。会場内を見ると、通常ではほとんど見つからないような大きさのネコハエトリが何匹も見つかる。一方では、採集を行った場所へ返しに行くという参加者もいる。F-1氏もその1人で、氏は一つの採集場所に毎年クモを逃がしに行くことで強いクモが多くその場所に生息するようになるのでは、と仮定し、実験を行っているのだという。

大会で優勝することで得られる「横綱」の地位は、その後1年間にわたって持続する。この地位はF-1氏曰く、出場者だけではなく、クモに対しても与えられるものなのだという。これは決勝トーナメントの表にて、出場者と共にクモの名前も併記されることにもその意識を見ることができる。

Ⅲ. 東京湾周辺地域のクモ合戦

Ⅱ章では現在の富津市の大会で直接見ることのできるクモ合戦の事例について整理してきた。本章では大会とは異なる場で行われてきたクモ合戦について述べていく。筆者は2021年10月から12月にかけて、神奈川県・千葉県各地にてクモ合戦に関する聞き取り調査を行った。その結果から、(1) クモ合戦のルール、(2) どのような人がクモ合戦を行っていたか、(3) クモの飼育容器、の三つについて事例を整理する。

(1) クモ合戦のルール

前章で扱った千葉県富津市の事例では、大会側が公式に定めたルールに則ってクモを闘わせていた。ネコハエトリ同士が野生下の習性として闘いのルールのようなものを持っているとはいえ、舞台の形状や不戦勝の判定などは人間の視点で決められている。それでは、大会以外の場で行われていたクモ合戦のルールには違いがあったのだろうか。

まず千葉県の鴨川市と館山市では、小中学校でクモ合戦を行っていたという、次のような事例を聞き取ることができた。

- ① 「押し出された方が負け」(K-1氏 昭和17(1942)年生まれ 千葉県鴨川市太海漁港)
- ② 「筆入れの中で闘わせた。逃げた方が負け」(K-2、3氏 昭和25(1950)、31(1956)年生まれ 千葉県鴨川市太海漁港)
- ③ 「箱の中、下敷きの上で闘わせた。逃げた方が負け」(T-1、2、3、4、5氏 昭和21(1946)～27(1952)年生まれ 千葉県館山市館山港)

これらの事例では、舞台として筆入れや箱が用いられている。富津市の大会と比べると、板状の舞台はクモが逃げ出した様子が分かりやすく、勝敗を判定し易い。一方で箱型の舞台には戦意の薄いクモにも逃げ場を奪うことで強制的に闘わせようとする意図があったと考えられる。

さらに、神奈川県横浜市の日日市場では次のような経験を語る話者がいた。

- ④ 「マッチ箱に2匹を入れてガラスで蓋をし、死んだ方が負け」(Y-1氏 昭和12(1937)年生まれ 神奈川県横浜市日日市場)

本来、ネコハエトリは死ぬまで闘わせずとも勝敗を容易に判定することができるが、この事例ではあえて密閉した空間に閉じ込めて闘わせ続けている。これは、生き物としてのネコハエトリへの観察が充分に行われていないことが理由として考えられる。というのも、Y-1氏がクモ合戦のことを記憶している小学生当時(Y-1氏は自身でクモ合戦には参加せず、基本的にその様子を見ているだけだったという)、横浜市日日市場周辺には戦中・戦後に他地域から移住した人々が多く、小学校にもそうした子どもたちが多く通っていた(Y-1氏もそうしたうちのひとりである)。Y-1氏は、クモ合戦は元々日日市場で行われていた遊びではなく、他の地域からの移住によって持ち込まれたものだろうと語っている。それが事実であるならば、クモ合戦という遊びが子ども同士の中で曖昧に伝えられるうちに「逃げた方が負け」というような要素が欠落したと考えられる。

クモ合戦は主に小中学生によって行われていた遊びのため、その文化の伝わり方では学校という要素も考慮しなくてはならない。次ではそこに注目し、クモ合戦がどのような人々によって行われ、伝

わっていたのかを見ていく。

(2) クモ合戦を行っていた人々

今回の調査で聞き書きを行ったほとんどの話者が、クモ合戦を中学校に進学する頃にはやめる遊びだったと語っている。地域内における小学生の交友範囲については、千葉県にていくつかの事例を聞き取ることができた。まず、鴨川市では太海出身のK-1氏やK-2氏は太海小学校に、鴨川出身のK-9氏（昭和10（1935）年生まれ）やK-10氏（昭和13（1938）年生まれ）は鴨川小学校にそれぞれ通っており、両小学校の生徒の間で交流はなかったという。このことはネコハエトリの方言名にも関連を考えることができる。ネコハエトリのオスは太海漁港の周辺では“オト”と呼称されているのに対し、鴨川漁港周辺では“カネグモ”と異なった呼び名になるのである。

一方、館山市では異なった状況となる。T-1、2、3、4、5氏はそれぞれ館山市内の豊房小学校や滝田小学校といった別々の小学校に通っていたが、中学校から同じ学校に通うようになることを理由に、地域内での交流行事が学校側によって盛んに行われており、そのため他の小学校の生徒と一緒に遊ぶことも多かった。ネコハエトリのオスに対する呼称もまた、市内の館山港、船形港周辺の各地域で“オトゴト”、もしくは“ゴト”と統一されている。

このように、学校を単位としたクモ合戦の伝承は今後の調査でもより注視していく必要がある。川名が論じた房総半島におけるネコハエトリ方言名の多様さは、氏が指摘したように地理的な要因も無視できないものであるが、一方ではこうした要素が関係しているのではないだろうか。

また、I章の(3)節でも事例を紹介したが、房総半島では漁師などの大人によってもクモ合戦が行われていた。

⑤ 「大人と子どもがクモを闘わせることもあった」(K-2、3氏 千葉県鴨川市太海漁港)

⑥ 「4、50年前に大人がクモを闘わせて遊んでいた」(K-4氏 昭和4（1929）年生まれ 千葉県鴨川市太海漁港)

このように、当時の子どもの視点から大人によるクモ合戦を記憶している事例は複数聞き取ることができた。また、次のように当事者として漁業の中でのクモ合戦の経験を語った話者もいた。

⑦ 「47、8年前、時化で漁に出られない日は他の漁師とクモを闘わせて遊んだ」(Q-1氏 昭和15（1940）年生まれ 千葉県山武郡九十九里町 ※Q-1氏は鴨川出身で、千倉港や白浜港を拠点にカジキのモリ漁を営んでいた)

こうした事例からは、房総半島内の複数の港を行き来する漁師たちの間で、クモ合戦が共通の遊びとして捉えられていたとも考えられる。

(3) クモの飼育容器

次に、ネコハエトリクモ合戦で用いられる飼育容器に注目したい。ネコハエトリのオスは採集された後、多くの場合手の平大程度の容器に一匹ずつ収められて飼育されるのだが、この飼育容器にも複数の種類が存在し、また地域ごとの特徴が見られる。

⑧ 「マッチ箱に入れて飼った」(Y-1氏 神奈川県横浜市十日市場)

⑨ 「マッチ箱に入れていた。専用の箱も駄菓子屋で売っていた」(K-1氏 千葉県鴨川市太海漁

クモの飼育容器

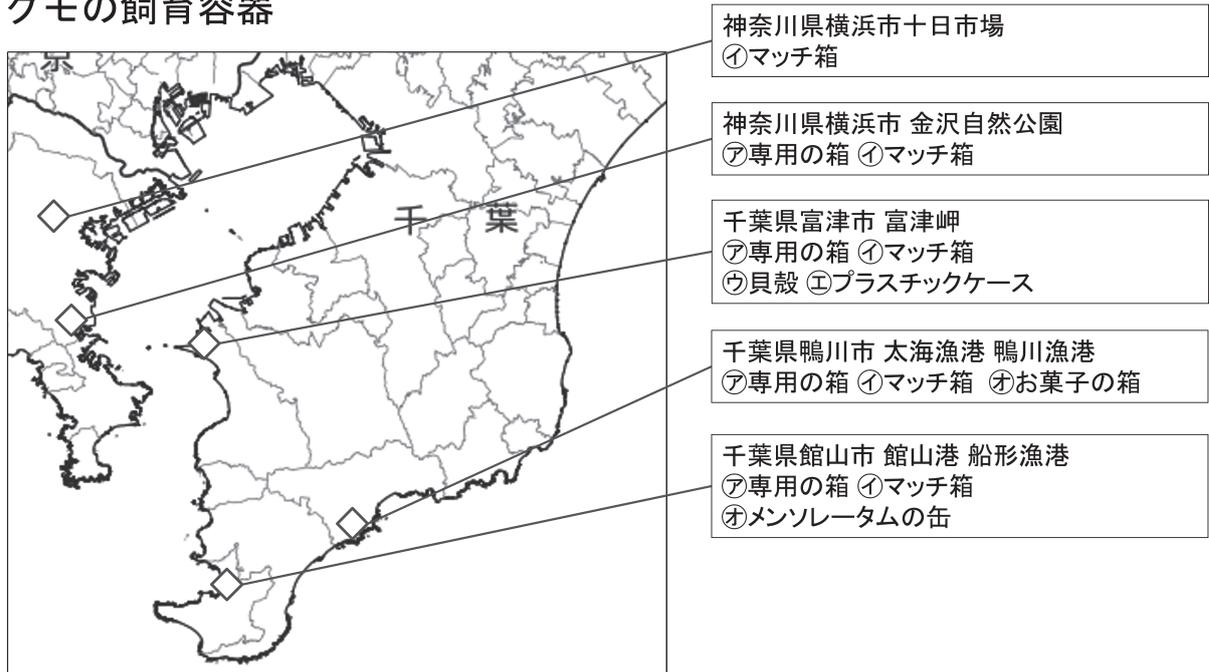


図1 飼育容器の事例を地図上に配置した図（「地理院地図」を使用）。筆者作製

港)

- ⑩ 「垂成体をメンソレータムの缶に入れて飼い、懐で暖めて孵した」(T-6、7氏 昭和20(1945)、22(1947)年生まれ 千葉県館山市船形港)

このほかにも複数の事例を聞き取ることができた。そうした事例を整理するため、まず、飼育容器の種類を次の5種類に分類する。

- ㊦専用の箱
- ㊩マッチ箱
- ㊵貝殻
- ㊴プラスチックケース
- ㊴その他

次に、この5種類の事例を地図上に配置すると次のようになる〔図1〕。

⑨の事例にも登場した㊦の専用の箱であるが、ネコハエトリを飼育するための箱が子ども向けに駄菓子屋で売られていたのだという。このことについては、富津フンチ愛好会が公式ホームページに次のような文章を掲載している。

「蜘蛛箱の父、加藤光太郎氏（横浜市）の本業は木型職人でしたが、1922年から1960年代のはじめまでおよそ40年間



写真4 販売されていたものと同型の飼育容器。厚紙、またはバルサ材の箱にガラスの蓋を被せたもの。
厚紙製（かつて販売されていたもの）約7cm×6cm×2cm
バルサ製（横浜市の大会の参加者が自作したもの）約7cm×3cm×2cm
2019年5月3日横浜市 筆者撮影



写真5 ホンピノス貝の殻を用いた飼育容器。3 cm×5 cm 2019年5月4日富津市 筆者撮影

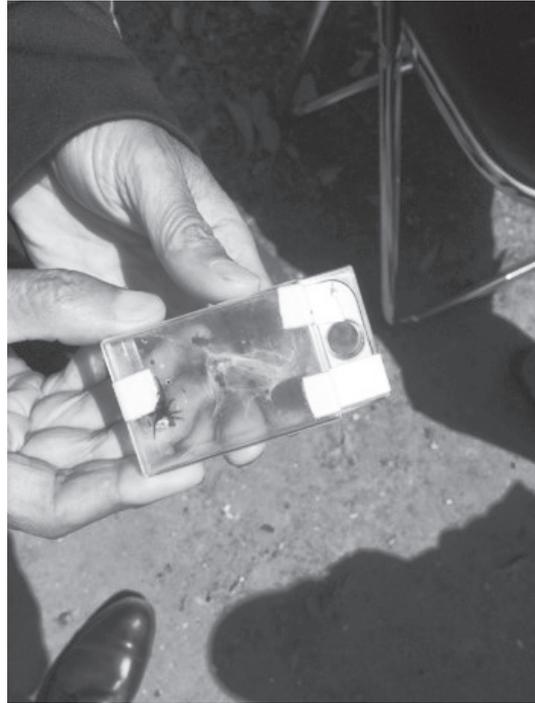


写真6 プラスチックの画鋸入れを用いた飼育容器。6 cm×4 cm×2 cm 2019年5月4日富津市 筆者撮影

にわたり蜘蛛箱を一手に生産していました。

第二次世界大戦後の昭和 20 年代に、駄菓子屋で販売していた蜘蛛箱は、最盛期には1年間で60万箱も生産していました」【富津フンチ愛好会オフィシャル HP より】

加藤光太郎という人物が製作した「蜘蛛箱」がどれほどの範囲の地域で流通していたかは不明であるが、時期については神奈川県横浜市にて次のような事例を聞くことができた。

- ⑪ 「昭和 39、40 年頃に最後の箱の販売を見た。千代紙で飾ってあったが、赤色がいやだったので買わなかった。自分がホンチの最後の世代ではないか」(Y-2 氏 昭和 32 (1957) 年生まれ 神奈川県横浜市金沢文庫)

図を見ると、専用の箱は横浜から離れた外房地域でも販売されていたことが分かるが、それがどこで製作されたものであるかは不明である。「蜘蛛箱」がどのように製造・流通していたのかについては、クモ合戦文化の地域的なつながりを知る上でも明らかにする必要がある。販売していた駄菓子屋の、昭和 40 年頃の内情を知ることができる事例にはまだ出会えておらず、今後注視していきたい。

㊦専用の箱を除くと、広い範囲で共通して用いられているのは㊦マッチ箱である。クモ合戦を行うにあたり、クモをこのような手の平大程度の容器に入れ、懐に収めて持ち歩いていたのである。しかし、現在大会が行われている富津市地域では、同じような大きさの容器でも、㊦貝殻や㊦プラスチックケースが多く用いられるようになる。特に㊦のような容器は大会参加者の間で最も一般的に用いられているものとなっている。現在、大会にて直接見ることのできるクモ合戦の手法が、東京湾周辺地域の中ではむしろ特殊な例であり、必ずしも一般的なものではないということが分かる。

IV. まとめ

(1) 東京湾周辺地域におけるクモ合戦の変遷

現在、直接ネコハエトリクモ合戦を見ることのできる場合は、千葉県富津市で開催される「日本三大くも合戦 横綱決定戦」と神奈川県横浜市で開催される「横浜ホンチ相撲春場所」に限られている。しかし高度経済成長期以前には横浜市域や房総半島沿岸部で小中学生や漁師によって盛んに行われていたことが、川名・斎藤によっても指摘されている上（川名・斎藤 1985）、筆者による実地調査でも事例を確認することができた。では、現在までの間でクモ合戦の形態はどのような変遷を経てきているのだろうか。

一つに、クモ合戦文化の伝承は、人の移動や交友範囲と強く関係していたことがいえる。川名は房総半島におけるクモ合戦文化の伝播について、舟運などといった水上の経路によるものを要因として論じた。実際、Ⅲ章の(2)節の事例⑦で挙げたように、複数の港を行き来する漁師にとって、クモ合戦は時化などで漁に出られない間の遊びであった。また、鴨川市の事例などでは漁港ごとに変化するネコハエトリの方言名も確認できた。しかしそれ以外の要因として、クモ合戦の子どもによる遊びという面に目を向けると、戦中・戦後期における移住に伴う転校による伝播や、逆に学校単位での隔絶といった、先行研究で論じられたものとは別の形での文化の広まり方も見えてくる。

二つ目として、特に飼育容器はクモ合戦と結びついた人の関係を知る手掛かりとなりうる。専用の飼育容器である「蜘蛛箱」については、現状ではその製造者や流通経路の実態を明らかにできていない。しかし横浜市域から房総半島の広範囲にわたって、昭和 40 年頃まで駄菓子屋や文房具店で販売されていたというこの商品の背景には、東京湾周辺地域に分布するネコハエトリクモ合戦文化同士のつながりがあるはずである。

さらに、「日本三大くも合戦 横綱決定戦」では多く見られるプラスチックケースや貝殻といった飼育容器のほかに、他地域からの参加者が持ち込んだマッチ箱や自作の桐箱などといった飼育容器が見られる。大会の場にて、複数の地域のクモ合戦文化が混在しているのである。多くの地域から参加者が集まる大会という行事について、次節では論じることとする。

(2) 大会という行事の影響

現在、富津市と横浜市という、東京湾を挟んだ 2ヶ所で大会という行事が盛んに行われるようになったことで、クモ合戦は再び季節の遊びとして再開されつつある。その一方で、以前は存在しなかった大会という形式が生まれたことによる変化についてもまた検討していく必要がある。

Ⅱ章にて述べたように、クモ合戦の大会への参加者は開催地周辺地域に住む人々のみにとどまらない。例えば「日本三大くも合戦 横綱決定戦」が幼少期にクモ合戦に興じた経験を持つ人々によって始まったように、他地域で同じような経験を持っている人々も大会の存在を知って地域をまたぎ、参加するようになってきている。そうした参加者の出身地域は九十九里町や横浜市など、東京湾周辺の広範囲に及ぶ。そこでは前節で述べたような多種類が見られる飼育容器など、それぞれの参加者が自らの経験に基づいた道具や手法を用いてクモ合戦の試合に臨んでいる。大会という場において、それまでにない形での地域間のクモ合戦文化の交流が行われているのである。

さらにそれのみにとどまらず、大会を通じてクモ合戦に初めて触れる参加者もいる。その中で最も多いのは小中学生で、親が大会参加者であったり、友達付き合いであったり、自ら大会に興味を持ったりと、富津市・横浜市どちらの大会でも参加のきっかけは様々である。そうした参加者が得るクモ合戦の知識は、富津や横浜で行われてきたクモ合戦文化を中心として、さらにそこへ他の様々な地域のクモ合戦文化が加わった新しいものであるといえる。

鹿児島県始良市加治木にて開催されている、コガネグモというクモの一種を用いたクモ合戦の大会について論じた研究にて筆者は、この大会「始良市加治木町 くも合戦大会」ではクモの飼育方法に起因する理由のために家族での参加が多く、クモ合戦の知識もまた家族内での伝承が多いことを指摘した（小林 2021）。ネコハエトリクモ合戦の大会における伝承は、親から子へのものや、シード権を持つような団体内でのもの、大会会場で経験するものなど、複数が考えられるが、具体的な伝承の形については、今後の調査で明らかにしていきたい。

おわりに

以上、大会を中心として、東京湾周辺地域におけるネコハエトリクモ合戦の文化について、その伝播と変遷について論じてきた。その結果、先行研究では検討されてこなかった学校単位での伝承や、大会という行事の開始による変化といった視点を提示した。本稿では筆者が聞き書き調査にて採集した事例がほとんどとなったが、新聞記事などといった過去の文献資料からの事例採集は今後の課題である。また、本稿の成果を踏まえ、クモ合戦が伝承されてきた各地域での漁業史や学校史にも注視したい。

野本寛一は『生きもの民俗誌』の中で、季節ごとに発生する昆虫を通して人間は気候の移り変わりを感じ取っていたことを指摘し、コオロギ、ワタムシ、クスサンなどといった数種類の昆虫にまつわる民俗について論じた。4月から5月にかけて姿を見せ、人々の遊びの対象となってきたネコハエトリもまた、そのように季節の中の暮らしに隣り合った生き物であったといえる。

今後の調査・研究ではクモ合戦について様々な媒体から事例の収集を続けつつ、重なり合った地域におけるクモに対する多様な心意や伝承についても検討していきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、富津フンチ愛好会様、横浜ホンチ保存会様、岩月健吾様、郷土歴史研究家の相澤雅雄様より、多大なるご理解とご協力をいただきました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

注

- (1) こうした飼育容器の事例については、章を改めて検討することとする。
- (2) 大会会場で筆者が採集した事例では、富津岬周辺では「フンチ」、青木地区周辺では「カンキ」と変化するようである。川名が先行研究にて示した狭い範囲での方言名の変化が、現在においても確認できることが分かる。
- (3) これについては川名も同様の事例を先行研究にて挙げている（川名 1992）。そこでは「バラグモ」の他に、ササに生息しているクモを指す「ササグモ」といった呼称も挙げられている。

参考文献

- 植木朝子（2021）『虫たちの日本中世史 『梁塵秘抄』からの風景』ミネルヴァ書房
- 川名興（1992）「くも合戦覚え書き」谷川健一編『動植物のフォークロア I』三一書房
- 川名興・斎藤慎一郎（1985）『クモの合戦 虫の民俗誌』未来社
- 小林兆太（2021）「虫を育て、闘わせる技法——鹿児島県始良市旧加治木町地域におけるクモ合戦の事例から——」『非文字資料研究』23：1-19
- 斎藤慎一郎（2002）『ものと人間の文化史 107 蜘蛛』法政大学出版局
- 白土三平（1988）『白土三平フィールド・ノート② 風の味』小学館
- 新海栄一（2017）『ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版』文一総合出版
- 野本寛一（2019）『生きもの民俗誌』昭和堂
- 八木沼健夫（1986）『原色日本クモ類図鑑』保育社
- 「富津フンチ愛好会オフィシャル HP」<https://www4.hp-ez.com/hp/muetaican121/2022年7月31日閲覧>
- 「横浜ホンチ保存会ブログ」<http://honchiyokohama.blog.fc2.com/2022年7月31日閲覧>